

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日中の比較語史研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2020-03-18 キーワード: 作成者: 陳, 力衛, CHEN, Liwei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002777

日中の比較語史研究

陳 力衛（成城大学）¹

1. 問題提起

日本漢語の語史について、従来、現行辞書（『日本国語大辞典』、『大漢和辞典』、『漢語大詞典』）の初出などで跡付けようとするのが普通であった。それをふまえてさらに中国由来の漢語と和製漢語とを弁別する手順としてもよく利用されてきた。しかし、たとえば『大漢和辞典』は収録語の時代的な偏りにより、近現代の用例採集の不足が明らかであり、同じく日本漢文の用例採集が少ないのが欠点であろう。それに未登録語が多い分、それらの処理には和製漢語と看做すか、単純に漏れたかの区別もつきにくいという問題が残る。一方の『漢語大詞典』はほとんど洋学資料と英華辞典を使わないし、見出し語でも用例でも近代語を無視または軽視している傾向が顕著である。したがって辞書編集のあらゆる制限からその手法の有効性に次第に疑いの目を向けるようになり、とくにデータベースやコーパスの構築により、辞書の記述をいろいろと修正しなければならなくなるころに来ている。近代語に限っていえば、辞書の不足や資料の不備がつねに課題の一つとして挙げられている。そこで最近中国で出版された『近現代辞源』（黄河清編、上海辞書出版社、2010）を材料に、いわゆる日中言語交渉を視点として、近代漢語の語史の構築を分析しようとする。本稿ではその際に出くわしたさまざまな問題を取り上げて、いわゆる近代的意味の不確定さと文芸中心主義による初出例の選出を指摘しつつ、近代語のコーパス利用によって修正できる範囲と可能性について考えたい。

2. 中国語資料を手掛かりに

『近現代辞源』の序文によると、本辞書は「明末清初から1949年前後の、西洋文化の影響を受けて成立した言葉、できれば翻訳語」を9500語収録している。故に、近代中国の対外交流に関する言語資料を多く使用しているため、『漢語大詞典』の欠点を補う点で期待されている。これまで2001年に、5000語収録の『近現代漢語新詞源詞典』（漢語大詞典出版社）を上梓した後、さらに語数を増やし9500余語を選択し編纂したのがこの『近現代辞源』である。前著との大きな違いは現代語のみを収録し、歴史語は収録していないことにあるという。

事実、この辞書の特徴といえは、何といても用例の豊富さと、できるだけ語源をとことん追究し、中国語文献での早期の例証を列挙することが挙げられる。大塚秀明はその点を高く評価し、『近現代辞源』によっていままでの辞書の語の初出年を引き上げることができたと、下記の例で説明した²。

- (1) 前著『近現代漢語新詞源詞典』の不明点が『近現代辞源』では ~ の初出年の後の年に引き上げ、 ~ の見出しを追加し、 ~ の用例を新たに補充した。たとえば、
- 打：1904 1889 『遊記日本図経』、1891 『格致彙編・格致釈器』
 - 肥料：1905 1878 『格致彙編・化学衛生論』、1899 『日本各地紀略』
 - 汽水：1917 1897 『進口雜貨税則』、1901 『中英新訂商約』
 - 商標：1889 『遊記日本図経』、1902 『東遊叢録・学校図表』

¹ chenliwe@seiyo.ac.jp

² 「初出、或いはそれに近い用例の記述と辞書の収録をめぐって」『国際シンポジウム「近代語の語源研究とその周辺」要旨集』漢字文化圏近代語研究会、関西大学文化交渉学教育研究拠点共催、2011.3.19

銀行：1854 『遐邇貫珍』、1859 『資政新篇』
 自転車：1870 『教会新報』、1891 『格致彙編』
 (2) 『近現代漢語新詞源』収録の「-品」10語のうち6語が『近現代辞源』で初出
 年が更新されている。

作品：豊子愷 1928	梁啓超 1922
食品：清議報 1899	遐邇貫珍 1853
商品：清議報 1900	日本国志 1890
印刷品：近代教育 1918	美国視察記 1915
戦利品：飲氷室合集 1920	日本留学參觀記 1904
装飾品：飲氷室合集 1910	博物学教科書 1906

そうしたより早くかつ確かな初出例を並べることで従来の辞書より一歩進んでいることが確認できる。となると、それをふまえていわば日中同形語の初出の比較にも役立つことになる。つまり、いわゆる日中言語交渉の視点から、当該辞書と日本の現行辞書の初出例を比較して、中国近代語にどれくらいの日本語が入って行ったか、あるいは逆に、日本近代語にどれくらいの中国語が入ってきたかを明らかにできる可能性が出てくるのではないかと思われる。事実、これまで現代中国語の3000語における日本借用語の調査を行い、意味分野別における日本借用語の割合をある程度解明したが、もっと語数を増やしてその全体像をつかもうとしているところへ、『近現代辞源』を手にして、資料の充実さに加えて「近代」というもっとも日中が接触しあう時代性にも魅かれ、その中の漢語の素性はどうかを明らかにしようと考えている。

一方、日本語から見ていわゆる新漢語の比率も気になる問題である。

- a類、中国近代語の直接借用
- b類、中国古典語の転用
- c類、日本人独自の創出

この比率は一体どうなっているかもこれを機にある程度はつきりさせたほうがいいのではなからうと考えて、具体的な手順としてまずは日中同形語を探し出し、そしてこれらの語の筋を明らかにし、中国から日本へ入ったものか、それとも日本から中国へ入ったものかを二分する。その上にさらにc類のような純粋な和製漢語を見つけようと目論んでいる。

調査範囲は『近現代辞源』の全般(1008頁)を目標としているが、今回はその十分の四の1-400ページまでの語を調査し、以下のような結果を得た。(空欄は未調査、F、Jは部分的)

	A	B	C	D	E	F	G	H	J	合計
総語数	84	554	503		42	128		415	386	2112
同形語数	17	221	193		14	79		176	207	907 (42.9%)

この辞書の収録語数の同形語率は42.9%と平均に見ることができる。この907語を分類可能な語とし、さらに、『日本国語大辞典』『幕末・明治初期漢語辞典』『明治のことば辞典』『明治大正新語俗語辞典』『大漢和辞典』の五冊の現行辞書によって初出の時代などを比べ、その素性明かしの作業を行う。そこでたとえば、E、Fに限って基本的には次のような分類を得ることができる。

- a類： 悪戦 児童文学 耳垢 発布 発電 発酵 発熱 発生 発音 発育 罰金 法官
- b類： 悪性 発表 発車 発動 発明 発射 法典
- c類： 悪感 悪化 児童団 耳殻 耳膜 二年生 二審 二元論 発動機 発祥地 発行 発展 法案 法定 法規

中国近代の新語として辞書に載ってはいるものの、調査対象である34語のうち、半数以上が日本からの同形語であるという結果になった。ただ、その過程でいろいろと問題に出くわしたので、本稿ではそのいくつかを見ながら、語史を構築する際の方法論的なものをも模索しようとする。

3. 『日本国語大辞典』の初出例

3.1 文芸中心主義

本稿では、『近現代辞源』の初出例の時代的早さと比較して、『日本国語大辞典第2版』の文芸中心主義の用例採集の傾向が露呈していることを指摘し、しかも日本の国語辞典の編集方針にかかわる普遍的な問題として取り上げた。たとえば、以下の四例はいずれも「中国（『近現代辞源』）のほうが日本（『日本国語大辞典第2版』）より初出例が早いことになるが、日本語の例は文芸関係のものばかりで、後の他の文献再調査によって日本語の用例を遡ることができることが分かった。

【病例】中国 1942、日本 1959 『海辺の光景』安岡章太郎「現在ではアメリカでもっとも多く見られる病例で」

「父母乃務 家庭育児」三谷周策著（鍾美堂、1905）

【病原体】中国 1919、日本 1940 『畸獣楽園』小栗虫太郎「この二人の医師が、睡眠病の病原体（ピョウゲンタイ）をチムバンジーに注射した」

「赤痢及麻刺里亜」島珪之助編訳（誠之堂、1897）

【茶話会】中国 1901、日本「大君の目出度い誕生日は茶話会では収まらなかった」『田舎教師』田山花袋 1909

珈琲会（茶話会）『処女のつとめ』（ダブイヂス著、阪田孫四郎訳博文館、1894）

【参戦】中国 1917、日本「参戦の希望がかなひましたら、男子一生の面目であり大いに頑張ります」『多甚古村』井伏鱒二 1949

拳国参戦と若き民軍の力 『軍事心理研究 第2巻』（下沢瑞世、武揚堂書店、1914）

同じことは、宮島達夫も「術科」という語を取り上げている。『近現代辞源』では「日本国志」（1890）、「遊歴日本観察兵制学制日記」（1899）を引用しているのに、『日本国語大辞典第2版』では阿川弘之「春の城」（1952）をひく。「これは小説以外の軍事関係文献から、もっとふるい例をさがすべきだ。日本国語大辞典の文芸偏重のあらわれである。」と指摘している³。

たしかに、すこし遡って調べてみると、「術科」という語はすでに1890年の『歩兵射撃教範』（小林又七著）に出ていることが分かる。

この調査の中で、往々にして日本語の用例の発生時代が中国語より遅れる場合に出会う。先行研究としてすでに宮島（2009）が指摘したように、幕末・明治以降を中心に『日国』の出典例を増補していたことが知られている。つまり、「文芸中心主義」という視点からその初出例は必ずしも「初出」を反映するものではないという。

【参議院】【参議員】中国 1903、日本 1946 「日本国憲法」

【極限】中国 1909、日本 1925 「女工哀史」「人間の技量は機械の働きの如く、世の進歩と逆比例に段々極限されて行かねばならぬ」

【基地】中国 1897、日本 1952 「春の城」阿川弘之「敵がB29の基地を造るまで何カ月かかるかだ」

【成人教育】中国 1921、日本 1932 「日本はどこへ行く」土田杏村「二つの行き詰まり

³宮島達夫「日中同形語の発掘」『国際シンポジウム「近代語の語源研究とその周辺」要旨集』漢字文化圏近代語研究会、関西大学文化交渉学教育研究拠点共催、2011.3.19

は日本の教育が学校教育の或る体系を本幹としてとり成人教育の広汎なる部面を閉却したところより来たものである。」

【化学方程式】中国 1903、日本 1930「機械」横光利一「化学方程式さへ読めない者実験を手伝はせて」

【化学繊維】中国 1957、日本 1973「現代経済を考える」伊東光晴「現実には化学繊維の難点である染色がうまくいかず」

【画報】中国 1884、日本 1909『田舎教師』「荻生さんから借りた戦争画報を二三冊又借りしてやったが」

【重版】中国 1890、日本 1930

【計画経済】中国 1934、日本 1933「最新現代語辞典」

【季刊】中国 1916、日本 1955 *少なくとも 1925 にすでにあった。

【極光】中国 1903、日本 1921「新しき用語の泉」

【機械化】中国 1936、日本 1951「山びこ学校の問題」

【集約】中国 1929、日本 1946「後裔の街」金達寿「われわれの弱点はここに集約されている」

【児童文学】中国 1928、日本 1944*書物(1944)甲<森銑三>二五「小波さんのわが児童文学の上に印せられた足跡はこの上もなく大きい」

【反応】中国 1903『新爾雅』、日本 1921*新しき用語の泉(1921) 小林花眠「反応(ハンオー) 略 又、二種若しくは二種以上の物体間に起る化学的变化」

これら例をみると、逆に中国のほうは使用が早いことになる。ただし、中国資料が証左となる場合が多い。当該辞書の引用文献目録一覧をみればわかるように、いわゆる日本関係資料が使われることが多い(後述するように、資料の位置づけが問題となる)。これはある意味では日本語の使用例を裏付けるものであろう。

3.2 日本語の使用例がない場合

『近現代辞源』には中国語の使用例があるが、『日本国語大辞典第2版』には日本語の見出しは立てたものの用例なしの場合がある。そのなかには、中国語由来の語もあれば、多くは日本語の辞書編纂の問題で、用例採集の努力が足りなかった語もある。たとえば、『近現代辞源』に出ている四語、

【華氏温度】中国 1942

【基肥】中国 1925

【不成文法】中国 1903

【児童団】中国 1942

について、『日本国語大辞典第2版』では用例を挙げていないが、近代デジタルライブラリーで検索した結果、日本語にはさらに遡って古い用例があったことがわかった。たとえば、

「摂氏華氏温度比較表」『鯷油漬缶詰製造書』伊谷以知二郎、松尾靈彦著、水産書院、1907

「肥料の種類-石灰と稲作-施肥上の原則-施肥の時期-稲の成育と施肥-基肥と補肥」『稲作改良論』横井時敬著、博文館、1904

「成文法及不成文法より生ずる一般被治者の利害」『法律社会之現象』河野和三郎著、吉岡書籍店、1888

「家族児童團規約貯金」『直江津郵便局誌 御大典記念』大正五年(1916)直江津郵便局

いずれも『近現代辞源』より早い使用例が認められる。ということは、我々には、『近現代辞源』を利用して『日本国語大辞典第2版』の初出例との時代差を捉えて、日本語辞書の問題をあぶり出して、さらに他の資料によってその初出の時代を遡ることが求められているのであろう。

ほかに、同じく中国語には使用例があって、日本語には見出しは立てたものの用例なしの場合がある。

加圧 1922、核反応 1942、加速器 1946、滑翔 1941、花柳病 1913、監製 1842、環節 1903、漢族 1902、基本法 1934、計時 1943、継任 1925、鍵盤楽器 1930、恒等式 1930、黒熱病 1935、財經 1948、採種 1908、彩陶 1920、獎金 1908、陳酒 1880、爆炸 1900、氷球 1949、標点 1918、部首 1920、不定根 1918、本位主義 1919、話劇 1918

この中に、「花柳病、漢族、継任、陳酒、部首、本位主義、話劇」のように明らかに中国語に由来のものもあれば、データベースによって用例確認できるものもあろう。「青空文庫」で確認したら、下記の使用例はあるものの、まだ中国の例には追い付いていない。

1949「思想と科学」この間に教育に関する二大法案「教育基本法」及び「学校教育法」が議会を通過した。

1925 雑誌「太陽」に「加圧鍋」の使用例があり。

この問題と関連して、宮島は日中対照研究の対象としては、従来「学校」「科学」のような日中同形語を取り扱ってきたが、日本語は「テレビ」、中国語は「電視」のように完全に分化しているものも取り上げるべきと主張した。なぜなら過去のある時期に日本で訳語としての漢語「電視」が使われていて、それが中国語に入ったかつての同形語であったからだ。その類例を「発掘」しようと、吉沢典男・石綿敏雄『外来語の語源』(1979、角川書店)を手がかりに、その日中同形の漢字語訳語を抜き出して、『近現代辞源』の初出と比較し、和製漢語かどうかを模索した結果、『外来語の語源』は二重の意味で日中同形語の<発掘>に役だつわけである。第一に、現代の日本語では使われていない(が中国語にはある)「滑翔機、電視」などが見つかった。第二に、『日本国語大辞典』に見出しはあるが例文がなかったり、例文の年代が新しくかったりしたもの(菜單、私刑)に、古い例文を提供した」という⁴。

4 近代資料とは何か

4.1 近代中国語資料の位置づけ

もうひとつ重要な問題をここで提起しなければならない。いわゆる近代中国語資料の位置づけはどのようにすべきかの問題である。『近現代辞源』に中国語の近代資料の一群としていわゆる日本関係資料が多く使われている点について、慎重に扱う必要があるのではないかと思う。参考文献に利用されている清末の知識人が日本で編纂した『新爾雅』や訪日記録や考察報告などに出てくる新語は中国語の新語の語源として扱われるよりは、むしろ日本語の使用の反映と見なしたほうがいいのではないかと思われる。先の「術科」の例に見られるように、「日本国志」(1890)、「遊歴日本觀察兵制学制日記」(1899)などに出ていても、中国語として実際に「使用」されたのではなく、ただ日本語を「記録」しただけであるから、どちらかという、日本語の問題点を逆に浮き彫りにさせた意味では、日本語研究のための「日本資料」と位置付けてもよからうか。

そうした中国人の記録した日本語がままたり、翁広平の『吾妻鏡補』(1815)は千余りの日本語を採録し、近世日本語との対照資料となりうる。玉燕の『東語簡要』(1884)は『吾

⁴ 同注2

妻鏡補』を参照しつつ 1017 語を収録し、『日本寄語』と同じように、意味によって 18 類に分けるほか、三字門と成句門も設けており、伊呂波歌も付している。『遊歴日本図経』(1889) は清政府の外交特使である傅雲龍が明治中期来日の際に纏めた遊歴記録であり、いわば日本紹介の百科全書のようなもので、全 30 巻のうち、巻 10 の「方言」は「星謂之保之語若火西」のように日本語 428 単語を漢字で書き表しており、また巻 20 「日本文学 上」ではいろは歌や国字や五十音図をも紹介している。日本語教科書として編集されたのは『東語入門』(1895) であり、清国駐日公使陳明遠の長男陳天騏が東京で「六年拳業」の後、帰国後出版したもので、2 千近くの日本語の単語や表現を日漢対音寄語として収録した。従来、以上のように中国資料の多くが日・漢両語の音韻体系の解明に使われていたが、近代中国人の残した多くの日本訪問記にも豊かな記述とともに当時の日本語、つまり新漢語を反映するものが多い。これらは、日本新漢語の中国への伝播を裏付けるものとしてとらえる向きもあるが、多くは見学先で目にした、耳にしたことばをそのまま記録したもので、著者が意識的に中国語として使用するつもりもないから、むしろ日本近代語を裏付ける資料と位置付けられる。つまり、日本近代漢語の初出例はこちらに多く求めることも可能であろう。

4.2 中国語の出典例の追及

『近現代辞源』において、近代資料に頼るあまりに、中国語の古典との接点をおろそかにされたことがある。下記のような例はいずれも中国語側が初出でない時代例を挙げている。そうすると、単純に初出の時代から見て日本から中国へと入ったものと勘違いされやすくなる。

- 【倉庫】中国 1889、日本 797 「続日本記」
- 【救急】中国 1904、日本 797 「続日本記」
- 【草案】中国 1889、日本 835 「性霊集」
- 【玻璃】中国 1919、日本 1876 「音訓新聞字引」
- 【給水】中国 1913、日本 1881
- 【給養】中国 1890、日本 1870 「西国立志編」
- 【記念】中国 1909、日本 1855 「和蘭字彙」
- 【化膿】中国 1857、日本 1811-45 「厚生新編」
- 【化石】中国 1876、日本 1763 「物類品隲」
- 【紀元】中国 1890、日本 1890

この中国語の時代選定はいわば「近代」において使われているかどうかには重点を置いていないようである。「倉庫、救急、草案」の三語はいずれも日本語のほうは上代の初出なのに、中国語のほうは近代以降となっているのがそのためである。事実、この三語はともに中国の唐以前に出ているし、「玻璃」だって明末の『東西洋考』にすでに使われる。つまり、編者の近代という設定の枠をはみ出した使用例(使用時代)をそもそも想定していないから、初出を全部近代に想定しているようである。

4.3 洋学資料の偏り(訳語かどうか)

『近現代辞源』はいわゆる漢訳洋書と英華字典の使用において偏りを見せていて、特に英華字典の場合は 19 世紀初期のモリソンだけに偏っている。中後期のロブシャイドの英華字典(1866-69)や『英華萃林韻府』(1872)の利用が少ない。

洋学資料の取り扱いには問題がある。楊少坪『増広英字指南』1879 を用例提供のソースとしているが、しかし本来は初版『英字指南』の発行年は 1879 年であり、『近現代辞源』に利用している『増広英字指南』は 1906 年の増補再版であるから、完全に版を混同していて、さまざまな誤解を招くことになる。関西大学に所蔵されている同テキストの版を調査

したところ、下記の表のように、初版と増広版はあきらかに異なるものである。

《英字指南》の版の違い(1879、1905)

	見出し語	英語	初版 1879	増広 1905	備考
日中同形語	参謀	Adviser		卷三	1866 英華字典
	委員 *	Deputy		卷三	
	反射	Semi-transparent		卷四	反射光
	和声	Harmony		卷四	
	電力	Working power of electricity		卷四	
	藝術	Book of arts		卷三	芸術類
	哲学	Philosophy	×「格致」	卷二	
	哲學家	Philosopher	×「博学人」	卷三	
	社会	Society	×「結社」	卷二	
	天文台	Observatory	×「觀天台」	卷四	
	天文学 *	Astronomy	×「天学」	卷四	1874、1875
	動物学 *	Zoology	×「生物学」	卷四	1875
非同形語	白帶	Leucorrhoea		卷四	婦嬰新説 1858
	白蘭地	Brandy		卷四	1828
	白煤	Anthracite coal		卷五	1877
	板刷	Clothing brush		卷五	
	刨花	Hair shaving		卷五	
	被单	Sheet		卷四	1828
	表鏈	Watch chain		卷四	1873
	餅乾	Biscuit		卷四	1828
	除法	Division		卷二	
	床位	Bunk; berth		卷四	1856
語釈語	刻画	Engraving		卷四	版画 1928
	主稿	Editor			編輯 1916
	白鴿票	Lottry		卷四	彩票 1889
	笛	F lute		卷三	長笛 1930
	三管号筒	Trombone		卷三	長号 1930
	抵逐	Repulsion		卷四	斥力 1937
	空床	Bedstead		卷四	床頭櫃
	大砲	cannon		卷二	加農砲 1908

つまり「参謀、委員、反射、和声、電力、藝術」のように、初版も再版もまったく同じものがある一方、「哲学、哲學家、社会、天文台、天文学、動物学」などは1879の初版ではまったく出ていなくて、それぞれ「格致」「博学人」「結社」「觀天台」「天学」「生物学」となっていたことがわかる。となると、

“哲学”这个词为日语词、于19世纪七八十年代传入中国、如1879年楊少坪『増广英字指南』卷三：“Philosophy、哲学、性理学”（942頁）

のように、重要概念の「哲学、社会」の中国への逆輸入の時代をこの辞書により30年近くも簡単に引き上げさせたという、完全に間違った情報を提供することになる。

ほかに、英華字典(1866-69)には「和音」が使われている。朱(2003)は「和声」を明

治 16-17 年の音楽関係書に見られるという⁵。ただし、こちらでは「声学」という物理学の用語であり、日本語では音楽の用語に用いられるのが異なっている。

そしてとくに問題として挙げるのは近代語としての認知の問題である。『近現代辞源』では「楽観」について『博物新編』1855 に使われる「楽観」の例を初出として採用しているが、「此乃割傘之険、人不楽観」というのはまだ字の単位での理解で「人は(それ)を見るのを楽しまず」と読むべきで、一語としてまだ確立されていない。というのは反対語の「悲観」は『新爾雅』(1903)を初出としていることからわかるように、「楽観」ももともと英語から訳された和製漢語だからである。同じ『博物新編』に出ている「生理、水質」は中国語本来の意味(なりわい、水のように)に留まっていて、いわゆる近代語の意味に至っていないことをすでに指摘していた。

5 . 日中言語交流の時間的幅の設定

日中交流史の視点から整理しなおして、時代別に中国語由来の新語と日本での創出とを分けて、とくに前者に由来する新漢語を捉え、それと後者との時代的区分を検討している沈国威(1998)の捉え方があった⁶。中国における「新漢語」形成史の時期区分は 19 世紀初頭~20 世紀初頭の 100 年間を 5 期に区分し、

準備期	1807-1840頃
発展期	1840-1860
官製翻訳期	1860-1880
停滞期	1880-1895
日本語導入期	1895-1919

期をいわゆる a の中国語からの直接借用部分とし、 を b、c とするような中国語の視点から史的にさらに区分けをするものである。

今回の調査ではそれを踏まえて、時代的な修正を加えることができよう。

5 . 1 中国から日本へ

漢訳洋書や英華字典の日本への流入の時代を考えると、中国語から日本語へ入った言葉の時代的下限は明治十年代の後半に設定することができよう⁷。

中国から日本へ	上限：4 ~ 5 世紀ころ
古典 近代 現代	
近代 現代	下限：1886

5 . 2 日本から中国へ

近代中国における日本語の受容について、日清戦争以降、日本から中国へ影響を及ぼすことが多くなってきた。それ以降さらに、

1895 - 1919	日清戦争からベルセイユ条約(熟成期)
1919 - 1945	ベルセイユ条約から敗戦 (決裂期) ⁸
1945 - 1972	日中国交断絶期

⁵ 朱京偉(2003) p 185 .

⁶ 「新漢語研究に関する思考」『文林』32、1998

⁷ 陳力衛「明治初期における漢訳洋書の受容」『東方學』第九九輯、2000.1

⁸ 狭間(2011)の分類に従う

のように、四期に細分できよう。一般では、いままで1900年ころの留学生による翻訳の高まりを日本から中国への逆流入の上限としていたが、『近現代辞源』の取り扱う日本関係資料をそのルートの一つとして捉えるなら、二十年遡ってもよろしいかと思う。すると、

日本から中国へ	上限：1879
古典 近代 現代	
近代 現代	

下限の設定もする必要があるが、日中戦争の終結を一つの目安とも考えられるが、国交のない時代であっても専門用語辞典の流通を考えると、もっと下って1960年代の半ばころにしても可能であろう。そして新語などを入れると、まさに国交回復以降ともなろう。

5.3 没交渉の時代

そうになると、たとえ、下記のような比較例が見られていても、日本から中国へという設定が不可能となるわけである。「結晶、細胞」などの例のように、時代設定が難しくなる例が増えてくる。

【測定】中国 1858、日本 1823 「遠西観象図説」

【花粉】中国 1858、日本 1833 「植物啓原」

つまり、こうした没交渉の時代において両国が語形の同じことばをそれぞれ使っていることになる。可能性としては中国語資料の精査が足りたくていわゆるさらなる祖例を中国語に探し求めることが予想される。あるいはたまたま両国語が同じ言葉を創出した「暗合」ともとられる。

上記のような日中間の交流可能な時代幅を設定する際、どうしても19世紀70年代の使用例が両方とも出てくることに遭遇する。そこで、もう一つの交流のルートとして挙げられるのは宣教師同士の交流によって新語のお互いに利用しあう可能性である。それも以下の要因から想定される。

- ・『和英語林集成』の上海印刷
- ・江南製造局翻訳館のフライヤの訳語統一に関する演説 1890年
- ・中国での新語集出版はほとんど宣教師の手によるもの

したがって、このルートでの交流がどうなっているかは未詳のまま今後の課題として大いに注目されたいと願っている。

6. 終わりに

『近現代辞源』の編者自身も認めているように、この辞典を出版してから「回归线、参加、发展、管理、热情、正确、祖国」の語が漏れているという指摘を受けたという。その他、編者自身も、「根性、共用、农产、庞大、入库、世纪、水库、外货、外流、外政、腺体、消音、学术、外用、延长、账务、最惠国」等が漏れていることに気がついた。しかも「世紀」は『近現代漢語新詞源詞典』で収録しているにもかかわらず、『近現代辞源』では漏れてしまったと言っている。

『近現代辞源』という鏡を借りて、日本語の漢語問題に照らし合わせるという研究方向と異なって、中国語における日本語の受容、あるいは中国語における日本語借用語の問題をも照射できるものである。たとえば『近現代辞源』の収録状況を踏まえただうえで、当該

辞書は中国語における日本借用語研究に確かな実例を提供しただけでなく、「白葡萄酒、交感神経、結石、絶縁、神経錯乱、十二指腸、嗅神経、塩酸」のように、従来の中国語辞書に収録されていない語の言語接触の経路を明らかにし、あらたな借用語としての認定に役立ったとも評価できよう⁹。

いれずにしろ、データベースやコーパスの構築により、辞書編集の問題点を補完することができるだけでなく、新たな視点の提示と問題の発見にもつながることとなるから、今後の語史研究に欠かせないものとなるのであろう。

文 献

- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社
梶原滉太郎（1992）「天文学」の語史」『研究報告集』13、国立国語研究所 p.77-121
朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流』白帝社
宮島達夫（2008）「テレビと電視 「電視」は和製漢語か」『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成 創出と共有』関西大学出版部
宮島達夫（2009）「語彙史の比較（1） 日本語」『京都橘大学研究紀要』第35号
宮島達夫（2010）「語彙史の巨視的比較」『漢日語言対比研究論叢』第1輯、北京大学出版社
陳力衛（2005）『『博物新編』の日本における受容形態について』『日本近代語研究4』ひつじ書房
陳力衛（2011）「『新漢語』とは何か 漢籍出典を有する語を中心に」『言語変化の分析と理論』おうふう、p59-76
陳力衛（2012）「英華辞典と英和辞典との相互影響 20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に - 」『JunCture』03号、名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター 『国際シンポジウム「近代語の語源研究とその周辺」要旨集』漢字文化圏近代語研究会、関西大学文化交渉学教育研究拠点共催、2011.3.19

⁹何華珍「中国語にある蘭学漢字語研究 - 『近現代辞源』の学術価値を論ず」『国際シンポジウム「近代語の語源研究とその周辺」要旨集』漢字文化圏近代語研究会、関西大学文化交渉学教育研究拠点共催、2011.3.19